
愛してるから

天川 七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛してるから

【Nコード】

N5348Z

【作者名】

天川 七

【あらすじ】

社会人の秋乃には、付き合って三年がたつ恋人の智紀がいる。しかし彼女はある日、彼が浮気している現場にはちあわせてしまう。しかもその相手は親友で……。秋乃と智紀の二つの視点から見える想いとは？

一度目は、あんたの嘘を信じた振りをした。

二度目は、アタシを選んだあんたを許した。

三度目に、自分の愚かさをようやく知った。

アタシは本当にあんたを想ってたのよ。

秋乃あきのは、手を繋いで歩くカップルに目を眇めていた。

仲良さげに顔をよせて笑いあっている二人。見覚えのある姿に、彼女の胸の内は、今にも爆発しそうだった。

高いハイヒールでツカツカと二人に近づくと、一声かける。

「ねえ、あんた達、なにしてるわけ？」

ぱつと振り向いた二人は、秋乃の冷えた視線を受けて、一瞬で顔を青ざめさせた。

男の名前は智紀ちき。女の名前は麻美あみ。

そう、相手は自分の彼氏と、親友だと思っていた相手だった。

「秋乃……」

「呼ばないでくれる？ あんたになんか名前を呼ばれたくないわ」
慌てて手を離れた麻美は、縋るように秋乃を見る。だが、今更そんな目で見られても、少しも心は動かない。

秋乃は腕を組んで、低く声を落とす。

「ここじゃ目立つし、喫茶店でも入って、じっくり話をしましょうか？ 言い訳くらいは聞いてあげる」

二人を見下して、秋乃は冷ややかに笑ってみせた。

近くの喫茶店に入り、ウェイトレスが下がると智紀が頭を下げた。
「……ごめん、秋乃」

「それは何に対しての謝罪なの？」

秋乃は煙草に火をつけて、ゆっくりとくゆらせながら智紀に尋ねる。

「俺が全部悪いんだ。仕事忙しいのはわかってるけど、中々会えないし、連絡もあんまないし……。お前はオレのこと、本当に好きでいてくれるのかわからなくなったんだ。……麻美は全然悪くない。許してくれ」

「違うのっ！ 私が誘ったんだから、智紀くんは全然悪くないのよ。だからお願い、智紀くんを許してあげて……」

声を上ずらせて、麻美が必死に智紀を庇う。そんな女の目に、恋慕の情を見つけて、秋乃は静かに目を細める。

彼女は智紀に惚れていたのだろう。だからと言って、何をしても許されるわけではないが。

「なあ、頼むから別れないでくれよ……」

泣きそうな顔で縋る男に、秋乃は黙って煙草の火を消した。凍えた心はひび割れて、血を流している。

いつもこの顔に絆されて、秋乃は男に許しを与えてきた。しかし、今回は違う。よりによって相手は自分の親友で、しかも、その親友だったはずの女は、彼に恋慕の情を抱いている。

もう、この恋は終わりにしよう。

裏切りにはもう耐えられなかった。

「……もういいわ」

「それってどういう……」

「別れましょう」

はつきりと別れを告げるのはこれが始めてだった。秋乃は、泣き出した麻美をちらりと見やり、ため息を吐く。

「悲劇のヒロインぶるのもいい加減にしなさい。泣きたいのはこっちよ。アタシは今日、親友と彼氏を一度に失くしたんだから」

「ごめ、んなさい……っ」

「どうしてだよ？　今までだったら許してくれたじゃないか。……オレが愛してるのはお前だけだ。本気だったわけじゃない。それでも駄目なのか？　お前は、やっぱりオレを愛してないのかよっ？」

「……愛してるから、許せないのよ」

初めて口にされた『愛してる』の一言に、智紀は大きく目を見開いた。

照れくさくて、なかなか言えずにいた言葉。

まさか別れの時に伝えることになるとは、思っていなかった。なんて皮肉だろうか。

秋乃は口には出せなかったが、本当に智紀を想っていたのだ。

「あ……きの……」

智紀がくしゃりと顔を歪める。

「アタシは好きじゃない相手と付き合えるほど、器用な女じゃないわ。三年も一緒にいたのに、あんたには伝わってなかったのね……」
それだけを告げて、秋乃は席を立った。

きつと口に出せなかった自分にも責任はあるのだろう。だが、今はあまりにも胸が痛すぎて、何も考えたくなかった。

普段飲まない酒だけど、今夜は飲みに出かけよう。

そうして上手に酔えたなら、自分に涙を許そうか。

二つものを忘れれば、夜の眠りも深いだろう。

一度目の浮気は、オレの嘘を信じてくれた。

二度目の浮気は、謝罪を受け入れてくれた。

三度目の浮気に、キミの心を始めて知った。

オレは本当にお前を愛してるんだ。

秋乃の後ろ姿が入り口から消えると、智紀は脱力してテーブルに頂垂れた。

「こんなつもりじゃなかったのに……」

そう、こんな風に別れたかったわけじゃない。ただ、秋乃の心が

知りたかっただけなのだ。

浮気を繰り返したのは、彼女に妬いてほしかっただけ。少しも本気じゃなかった。

「智紀、くん……ごめんなさい。私が智紀くんに相手をしてほしいなんて頼んだから……」

麻美は泣きすぎて、マスカラが崩れた酷い顔をしていた。

二人は高校からの親友だったと聞いている。社会人になっても関係が続いているのだから、その付き合いは智紀よりも断然長い。

「いや、それに応えたのはオレだから。結局オレが悪いんだ。麻美は気にしなくていいよ」

「でも……」

「それよりも、自分のことを心配したほうがいい。お前の彼氏に知られたら同じことになるかもしれないだろ？」

二人はお互いの相手を妬かせるために浮気をしたのだ。

しかし智紀の言葉を聞いた瞬間、麻美は更に泣きそうに顔を歪める。

「ごめんなさい……っ！ わ、私、嘘をついてたの……」

突然の謝罪に、智紀は怪訝な目を向けた。

「どういふこと？」

「私、本当は彼氏なんかいないの……。ず、ずっと、智紀くんが好きで……。一度だけ付き合ってもらえればって、そう思っただけなの……」

こんな風に関係を壊すつもりはなかったと麻美は泣く。

「……そうだったのか。だけどごめんな、お前の気持ちには応えられないよ。オレはやっぱり秋乃が好きだから」

「うん……わかってる。あんな告白聞いちゃったら諦めるしかないよ」

麻美は涙を拭いて、小さく笑った。

「智紀くんはこれからどうするの？」

「あいつに許してほしいけど、秋乃がああ言ったんだ。きつと土下

座して謝っても、あいつは許してくれないだろうな。だけど、それでもオレには秋乃が必要なんだ」

「諦めないのね？」

「一生かかってもいい、許してもらえるまでずっと頭を下げ続ける。今度こそ、下手な小細工はなしで素直にぶつかるとよ」

「そっか。それじゃあ、私は消えるね？ 智紀くんにももう電話しないし、二度と会わないよ」

「……元気でな」

「うん。でも、もしいつか ……」

「えっ？」

「……ううん、なんでもない。さよなら、智紀くん」

麻美は寂しそうに笑うと、離れていった。

残された智紀は苦しそうな顔で、一人呟く。

「結局、オレが全部壊しちゃったんだな……」

欲しかったものが、ずっと前から差し出されていたことを気づけずに。

今夜は少しも酔えないが、それでも酒を傾けた。

そうして想いを飲み下し、キミを想って涙する。

見上げた夜空に鼻唄歌い、眠れぬ夜を隠そうか。

(後書き)

初めての方はお初にお目にかかります、二度、三度とお越しの方は
お久しぶりです、天川です。足を運んでくださって本当にありがとうございます
うございました！ 拙い作品ですが、秋乃と智紀を通して、読んで
くれた貴方に何か伝わっていればと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5348z/>

愛してるから

2011年12月18日00時48分発行